

乳幼児教育相談における取り組み

- 訪問による乳幼児教育相談
- 聴覚障害を併せ有する
重複障害のある乳幼児に対する支援
- 個別家族支援プログラムについて



訪問による乳幼児教育相談

庄司美千代

1 本校における乳幼児教育相談の実態

県には、2校の聾学校があり、県内医療機関から紹介された聴覚障害乳幼児の教育相談を実施している。

本校に来室する乳幼児の居住地は、広範囲に渡ると共に、交通の便が良くないことから、大半の場合、自家用車での来校となっている。遠方からの来室では、片道1時間半から2時間あまりかかるケースもみられる。さらに、冬期間の来校は、雪の影響もあり、非常に時間がかかることから、乳幼児ならびに保護者にとって、負担になることが容易に想像される。

また、家庭の事情から、通室することが困難なケースもいくつかみられる。保護者としては、可能な限り、聾学校に通い、相談に応じてもらいたい気持ちを抱いているが、現実的に困難な状況下で、不安や悩みを抱えていることもあると思われる。

乳幼児にとって、家庭は、生活の中心となる場であり、親子のふれ合いや営みを多く持つことができる場である。また、保護者も、家庭や地域でわが子とどのように接したら良いか、具体的な方法を知りたがっている。

こうしたことから、本校では、家庭訪問ならびに聴覚障害乳幼児の在籍保育園等への訪問相談を行ってきた。訪問回数は、当該年度の相談児数ならびに居住地が、変化するため、特に決めている訳ではない。本稿では、これまで行ってきた訪問相談の事例を紹介し、今後の訪問相談の在り方について考察する。

2 教育相談乳幼児の家庭訪問

(1) 家族の相談を中心とした訪問事例

本校に来校するのは、両親が中心であるが、他の家族の方にも来校していただくことを歓迎する旨をお伝えしている。実際の家庭生活を考えた場合、兄弟や祖父母等の家族も視野においた相談が必要である。訪問する際は、家族の話を聞くことを重視すると共に、家族が知りたい情報をあらかじめ把握し、訪問時の主な計画を立てている。

① 家族から話を聞く際の留意事項

両親以外の祖父母や兄弟とは初対面であることが多いため、まずは、それぞれの話を十分に聞くように心がけている。実際の相談では、以下の点に留意してきた。

ア 家族の気持ちや要求を把握すること

- ・ 診断や医師の説明をどのように受け止めているのか。
- ・ 本校に来校したことやその後の相談に対してどのように受け止めているのか。
- ・ 診断後、子どものことをどのように見ているのか、感じているのか。
- ・ 気になること、納得いかないこと、不安なこと。
- ・ 知りたいと思っていること。

イ 家族の話を聞く際の態度

- ・家族の方が話してくれたことを復唱しながら聞く。
- ・その場にいる全員の話聞く。
- ・くり返し出てくる話題があれば、そのことについて、詳しく話してもらう。

ウ 兄弟と接する際の態度

- ・低年齢の場合がほとんどのため、まず、一緒に遊んだり、担当者に見せたがっているものに十分に応じる。
- ・相談児と兄弟とが遊ぶ様子や保護者とのかかわり等を遊びながら観察する。
- ・観察したことをもとに、相談児と兄弟とで遊ぶ際に、遊びを楽しめるような関わり方やルール等をその場で伝えていく。(順番の交代、物の貸し借りの仕方等をどのようにしたらよいのかを指さしや身ぶり等を用いてやってみせる。)
- ・兄弟が共感を求めていることには、十分に応じ、一緒にいることを実感してもらえようにする。

エ 相談児の様子を観察し、成長や良さを具体的に述べること

- ・相談児の家庭での日頃の様子(遊び、食事、家族とのかかわり、買い物等)を聞く。
- ・相談児の良いところ、自慢できるところを聞く。
- ・相談児と一緒にしてみたいこと、楽しみたいこと等の願いを聞く。
- ・実際に生活していて、困っていることやどのように対応したら良いのか知りたいことを聞く。
- ・相談児が実際にしていることや遊びの様子、家族が話してくれたことについて、その行動の良さや成長を伝える。なぜ、その行動が良いのか、それがやがてどのような成長として現れるのかを伝える。(物の置き場所をよく覚えている、家族の顔を良く見ている、1回体験したことを覚えている、伝えたいことがあると手を引っ張る等、相談児が視覚情報をよく活用していたり、本人なりにメッセージを伝えようとしていたりするエピソードがあれば、その子どもなりの物の考え方や伝え方があることを説明し、今の行動や生活が子どもにとって価値ある学びであることを伝える。)

オ 相談児と家族とのかかわりの良さや価値を具体的に述べること

- ・相談児と家族とが接したり、遊んだりしている場を取り上げ、家族の接し方のどこが大事なのか、そのような接し方をすると、子どもがどのように育っていくのかを伝える。
- ・家族が考えている教育方針(しつけや兄弟間の関係等)について、共感しながら話を聞き、これまであった事例も紹介しながら、相談児に対して、家族それぞれの立場でかかわっていただいたことを伝える。

実際の相談では、保護者や家族の話により、上記全ての事項を話題にすることは困難である。したがって、中心となる話題が何であるか、また、家族にとってどの程度の比重を占めているのかを把握しながら、重点項目を選ぶようにしてきた。

「聾学校から担当者が訪れる」ということに対し、ほとんどの家庭が、快く訪問を受け入れてくれる。しかしながら、家族一人ひとりにとって、「きこえない・きこえにくい」ということに対するイメージや印象はまちまちであり、自分たちがおかれた状況を理解するのは、大変

時間がかかることである。また、子どもの成長に伴い、新たな不安や要望が生じてくるものである。したがって、家庭訪問をきっかけに、家族と出会い、それぞれの立場や思いを知ることが、その後の相談、支援を計画する上で非常に重要であると考えられる。

②主な情報提供事項

事前に保護者を通して、家族の知りたい情報を把握すると共に、保護者、特に母親から家族に伝えて欲しいことを把握するようにしている。これまで行ってきた情報提供内容は、以下の通りである。

ア 聞こえに関すること

- ・学校で行った聴力測定や病院での聴力検査の方法について、絵やイラスト入りオーディオグラムを用いて説明する。(どの程度の音が聞こえているのか、聞こえていないのか等)
- ・上記の結果、周りの物音やことばが、どの程度聞こえていると予想されるかを伝える。
- ・補聴器をつけた場合、どうなるのか(予想される反応、補聴器をつけてもすぐに音やことばが分かる訳ではないこと、子どもさんなりの学習が必要なこと等)。
- ・乳幼児の聞こえの程度は、1～2回の検査で正確に分かるものではなく、育てながら、子どもの成長と共に把握していく、すなわち時間をかけてみていくものであること。

イ 聾学校での様子に関すること

- ・学校での相談時にみられた子どもの行動の良さや価値について、具体的に伝える。(子どもの発信や根拠をもって行動していること、人とのかかわりに対する意欲、興味・関心を持ち行動している様子等)
- ・学校での様子をビデオ撮影し、学校で活動している内容と意図を説明する(遊びを通して子どもが学んでいること、成長したこと、現在していることが今後どのような成長につながるのか等)。
- ・保護者、特に母親が学校でしていることを取り上げ、子どもの成長を支えていること、また、ただ学校に連れてきているのではなく、子どもに心を傾けて接していること等を伝える。
- ・乳幼児教室(週2回の集団活動や保護者教室)や幼稚部の概要について、パンフレットや写真を用いて説明する。

ウ 発達に関すること

- ・ことばの発達の道筋、ことばの果たす役割(コミュニケーション、思考、行動調節、感情発散等)等について、イラストや事例を用いて説明する。
- ・話すこと、聞くことだけが「ことば」ではなく、指さしや表情も含めた発信について、子どもの様子を例に説明する。
- ・聞こえやことばは、単独で発達するものでなく、人や周囲の物とのかかわりによって育つことを説明する(家庭で行われている遊びや食事、着替え、トイレ等を例に説明する)。

エ 子どもの成長や進路に関すること

- ・聾学校に在籍している子どもや教育相談にきている子ども、成人聾者等の存在について説

明する。

- ・実際にどのような学習をしているのか、進路先や就労先等について説明する。

相談児の家族にとって、聞こえとことばに関することは、大きな問題であり、1回の訪問や相談で解決されるものではない。実際の相談では、やはり、家族が知りたがっている話題を中心に展開し、家族が自分の知りたいことがある程度分かったという実感を抱くことができるよう努めてきた。「聾学校の担当者は、我々の話を聞いてくれる、我々の要望に応じてくれる」という信頼関係を築き上げていくことが重要であると考えた。

母親との相談時に、祖父母に対する不満や不信感が表れ、何とか説得してほしいということもある。また、聾学校では特別な訓練をしていて、祖父母である我々の出る幕はないと思こんでいるケースもある。さらには、祖父母の口から、「なんでこんな子が生まれてきたんだろう。」「なぜ、こんなふうになってしまったのか。」と両親のいる前で言われ、いてもたってもられない雰囲気になることもある。

両親も祖父母もこれまでの経験と人間関係を築いてきており、それぞれの立場を尊重した姿勢で相談に望むことが必要だと考える。そのため、祖父母を説得することが担当者の役割なのではなく、それぞれの立場や思いを家族内で出し合い、家族間で理解していく営みのきっかけを作ることが求められると思われる。

(2) 家庭や地域での親子活動を中心とした訪問事例

① 近所の散歩を通したやりとりの事例

休日に親子で散歩するとの話を受け、家庭訪問時に実際に散歩をした。母親は、子どもが先に走っていくことが多く、車道に出られると困ると言っていた。訪問時には、スケッチブックとペンを持参し、相談児と母親、担当者の3名で散歩をした。

ア 訪問時の様子

- ・相談児は、勝手に走っている訳ではなく、目にした物（道ばたの草花、落ちている木の実等）に興味を持っていることがうかがえた。
- ・そこで、担当者も共に走っていき、相談児の見つけた花や木の実に注目した。すると、相談児が担当者に指さしてくれたので、「あったね、お花だね。」と応じてみせた。次々と目にしたものを知らせてくれるので、今度は、「また見つけたね、お花、あったね。」と言いながら、スケッチブックに花を描いてみせたり、手話で花を表現してみせたりした。
- ・相談児は、周囲を見つめながら、いろいろな草花や石ころ、木の実等を教えてくれ、繰り返すうちに自ら手話で花を表現したり、「ああ(ハナ)」と声を出したりするようになった。
- ・今度は、担当者も自分が気づいたものを指さしたり描いたりして知らせた。相談児は、絵や指さされたものをみて、担当者の顔をうかがっていたので、「ワンワンだね。」「ブーブー車だ!」と言ってみせると、手話を真似していた。
- ・車道に出たため、道ばたに腰掛け、担当者が車やバイク、トラック等、目の前を通る車を描いてみせた。相談児がじっと絵を見つめていたところで、「あ、ゴーッって、聞こえた。

車だ!」と実際の車を指さしてみせると、相談児も車が通りすぎていくのをずっと目で追っていた。しばらく車の往来をみていると、相談児が自ら、「あ！（くるま!）」と担当者に知らせてくれたり、耳元に手を添えたりした。

このような活動をしながら、途中から、「ママにも教えてあげよう!」と誘い、母親も交えて散歩をした。

イ その後の母親からの感想

- ・平日は仕事のため、休日しか接することができないが、こんな散歩でも、たくさん会話ができることが分かった。子どもがとてもうれしそうに伝えているのを見て、うちの子どもがかわいと思った。
- ・遊びながら言葉が育つと言われて、頭では分かっているものの、どうしても、何か教えなければいけないとばかり焦っていた。しかし、散歩しながら、子どもがちゃんと先生や私の真似をして表現したり、それらしく言ってくれたりしたので、「こういうことなんだ。」と感じた。

訪問後、母親から、このような感想を得た。訪問当日は、相談児がたくさん表現してくれたため、母親に対してその都度説明するゆとりがなかったが、その後、家庭でこんなことをしてみた、あんなことをしてみたと知らせてもらった。その後の母親のかかわりによって、車道に出た際には、母親と手をつなぎ、「出発」の身ぶりをして歩くようになったそうである。

② 近所での買い物を通したやりとりの事例

外出すると、自動販売機がある度にお金を入れると言って大泣き、大暴れして困るという相談を受けた。母親は平日遅くまで仕事をしており、相談児と接する時間があまりないケースであった。

ア 訪問時の様子

- ・1日に何をどれだけ買っても良いのかを母親に決めてもらい、必要な額だけ相談児用の財布に入れてもらった。
- ・母親と相談し、夕食の献立をカレーライスとサラダにしてもらい、食べ物カードと家の写真を持参して出かけた。
- ・相談児にジャガイモや人参などの絵カードを見せ、「どこかな?」と動作してみせると、すぐにかごを持ってきて、探し始めた。見つけると、担当者や母親の顔を見て知らせたので、「あったね。ありがとう。かごに入れて、おねがい。」と答え、他の食材も同様に扱った。探せない食材があると、「どこかな?」と探す動作もして、担当者に訴えてくれた。
- ・お菓子コーナーでは、うれしそうにしていたので、「1つね。」と指で示してみせ、母親にも同様にしてもらった。相談児は、子ども用のかごを持ち、もっと入れたいと顔をしかめたが、「1つね。どっちがいい?」と選ばせると、しぶしぶながらも1つ選んだ。もう一方の菓子は、「欲しかったね。でも、残念。これは、バイバイ。」と言いながら、棚に戻した。担当者がしてみせると、黙ってみてはいたが、その後、母親の顔を見て、怒り出した。母親にも同様にしてもらい、「欲しいの。でも、残念、バイバイね。」と言ってもらっ

た。しばらくぐずってはいたが、担当者がいるためか、あきらめてレジに向かった。この日は、自動販売機を見ても、ほしがる様子は見られなかった。

イその後の母親からの感想

- ・今まで、ダメダメとばかり言っていて、自分でもイヤだったが、食べ物の絵カードを見せると、あんなに早く探せるとは思っていなかった。うちの子どももできることがあるんだと分かって、ちょっと嬉しかった。
- ・その後もお菓子やジュースを欲しがることには変わりはない。同じようにやってはいるが、私（母親）の財布にまだお金があることをちゃんと分かっていて、こっちの財布からお金を出してと訴えてくるので、困る。ただ、前と違って、大暴れすることは減ってきた。機嫌がいいときは、1つと言うと、ちゃんと選べるようにはなった。

訪問後、母親から上記のような感想が得られた。相談児なりに、大人のすることや持ち物等をよく見ていること、「こうしたら、こうなる。」という理屈も理解していることを誉めた。また、根気強く、「1つ」を知らせた母親の努力も認めると共に、相談児にさせたくないことのみ目を向けるのではなく、新たに興味を持たせること（食材探し）、ダメと言う前に、「欲しい。」と表現する場を設けること、その上で、「残念。」と言ってみせることで、不満のはけ口になり、子どもなりに折り合いをつけることができるのではないかと伝えた。

母親自身も、相談児が非常に活発であることから、「何かされては困る。」という思いが強く、何かする度に「ダメ。」を連発していた。家庭でじっくり接することができないという苛立ちも感じられたため、その後の相談においても、できるだけ、家庭でできること、母親が出来るそうだと感じていることを実際に取り上げて行うようにした。

3 教育相談乳幼児の在籍保育園への訪問

乳幼児教室への来校が困難な例の一つとして、両親共に就労しているケースが挙げられる。大半の相談児は、地元保育園に通っており、担当保育士も具体的な対応の在り方を知りたいと感じていることがほとんどである。

(1) 在籍園での保育参観を中心とした訪問

相談児が日常、どのような生活を送っているのかを参観によって知るため、保育参観を行った。好きな遊びや担当保育士とのかかわり、友達同士のかかわり、昼食から着替え、昼寝までの様子を参観し、その後、担当保育士との話し合いを行った。

実際の参観では、他の幼児が話しかけてくることが多く、時には、共に遊ぶこともあった。また、訪問回数を重ねた箇所では、担当者が、相談児や他児と遊んだり、絵に描いてやりとりをしている様子を保育士にみってもらうこともあった。

参観後の話し合いでは、相談児なりの物の見方や理解の仕方を説明すると共に、担当保育士が行っている働きかけを具体的に取り上げ、相談児に良い影響を及ぼしていることを伝えるようにした。

(2) 担当保育士の研修を中心とした訪問

過去の事例として、同一市内（本校から車で1時間半程度の地域）の3つの保育園に相談児が在籍していたケースがある。ある保育士の方による働きかけにより、3園の担当保育士合同の学習会を数回実施した。（1ヶ月に一度の割合で3園を順に聾学校担当者が訪問。午後は、3園合同学習会という形をとった。）

主な内容は、以下の通りで、1回につき、3～3時間半程度である。

- ① 各担当幼児の状況報告や聾学校担当者への質問
- ② 聞こえの仕組みや難聴の程度に関する情報提供
- ③ 実物、写真、絵カード等の手がかりに関する情報提供
- ④ 表情や指さし、身ぶり、簡単な手話等を用いたコミュニケーションについて
- ⑤ 聾学校で行っている相談（相談児との遊びや活動、乳幼児教室）の概要
- ⑥ 補聴器の扱い方や留意点に関する情報提供
- ⑦ 担当保育士が問題だと感じている事柄、相談児の行動等に関する話し合い
- ⑧ 保護者への接し方や園での出来事の伝え方 等

4 教育相談幼児が入園予定の保育園等への訪問

乳幼児教室を経て、新たに幼稚園や保育園に入園するケースでは、保護者や園の要望を受け、事前の訪問を行ったケースがある。

(1) 聴覚障害幼児を初めて受け入れるケース

ア 引継時の留意点

- ・初めての受け入れであるため、「きこえない・きこえにくい」ことに対し、理屈で説明するよりも、まず、相談児の実際の遊びやコミュニケーションの様子から感じてもらうことを重視した。そこで、冒頭、Aさんの個人指導場面（かるた取り）のビデオをパワーポイントを用いて流した。
- ・ビデオを通して、相手とやりとりを楽しむ、ゲームを楽しむ、相手の話を聞き理解する、相手に話して伝える等、相談児の行動を知ってもらった上で、時と場合によって、補聴器が役に立たないこと、聞こえにくいこと、聞こえないことがあることを具体的エピソードを出して説明した。また、相談児は聴力レベルに左右差があるため、片方だけの装用であることにも触れた。
- ・聴覚障害に関し、「難しすぎるイメージを抱かれても困る一方、軽く受け止められすぎても困る。」というのが、担当者の正直な思いであった。また、保護者の不安な気持ちや子どもさんに対する思いを知ってほしいという理由から、パワーポイントのスライドを用い、乳幼児教室での親子活動やコミュニケーションの様子を写真提示し、母親が具体的にやってきた働きかけ（視線を合わせる、実物や絵を用いて伝える、共感して応じる等）について説明した。

イ 訪問後の感想から

- ・幼稚園では、園長先生はじめ、大半の職員が参加してくださった。ビデオで相談児の様子を

見ることで、先生方も安心したようであった。補聴器の扱い方、騒音を減らす配慮、話しかけ方等に関する質問を頂いた。今後、必要なときに、随時連絡を取り合うことを確認した。

(2) 難聴児受け入れ経験がある園のケース

これまで通園していた乳児園を卒園し、4月から別の保育園に入園したケースである。入園予定の保育園は、これまで1名の聴覚障害児を受け入れた経験があり、本校からも訪問を行っていた。また、担当保育士が本校学校公開に参加したこともあり、園長先生はじめ、大変熱心な先生方ばかりである。新たな相談児の入園にあたり、引継と全職員を対象にした研修会の希望を頂いた。そこで、担当者が訪問し、情報提供を行った。

ア 引継時の留意点

- ・受け入れ経験があるものの、子どもの行動や聴覚活用の状況が異なるため、引継の際は、個人指導場面とひよこ教室場面でのVTRを持参して、実際の行動ややりとりの状況をもてもらいながら説明した。また、保育園の日課に沿って、「このような場面では、このような行動ができる」「このように指示すると、応じて行動する」「このような場面だと状況が分からず、不安になる」等、例示しながら話した。
- ・難聴幼児に接した経験のある先生もおり、これまでも、訪問を通じて話し合ってきた。そこで、子どもがおかれた気持ちを中心にすえて「きこえない・きこえにくい」ことを共に考える場を設けるようにした。そこで、1名の方にはヘッドホン（大音量での音楽や雑音）を装着してもらい、周囲の人に会話をしてもらおうといった簡単なワークショップを行うようにした。

イ 訪問後の感想から

- ・子どもの言うことが分からないときの対処について、不安を抱く先生が多かった。年少児になると、保育士数も減るため、目の届かないところでの幼児の行動を知るためには、ことばが大切にあることを痛感されていたようである。先生方の思いが非常に大切なことを伝えると共に、相談児は、今、目の前で起こっている出来事も十分に表現するすべを獲得していない段階であることも伝えた。そして、まずは、先生方が見ているところで起こったこと、したことをその場で言ってみせること、身振りや表情も交えて表現してみせることを伝えた。また、子どもと接しながら、その気持ちや行動の根拠等をことば（話しことばに身振りや動作、表情等も加えて）に置き換えてみせることで、子どもがことばを獲得していくことを伝えた。そして、それらを組み合わせて見ていないところの話をしてくれるようになる、ということを経験した。
- ・また、これは、保育園だけの問題ではなく、家庭でも同じようにしてほしいと家族に話していることも伝えた。何もかも先生方が自己責任と重く受け止めずに、できることを少し設定して行い、できたら次へと進んでほしいことを伝えた。さらに、家庭では、どのように伝え合っているのか、どのような手話を使っているのか等を保護者に尋ねてみることで、家庭と園とで共通理解を深められるであろう事も伝えた。
- ・ワークショップを行った結果、「みんなが楽しそうに笑っているのに、自分だけ分からず、

恥ずかしいような悲しいような気持ちになった。」「取り残された気分になった。」「自分の方を見て笑われると、悪口を言われているようでムツとした。」等の感想が得られ、聞こえない・聞こえにくいということが気持ちに及ぼす影響を考えてくださった先生方が多かった。

5 訪問による相談に関する考察

本事例を通して、訪問による相談の成果ならびに課題として、以下の点が挙げられる。

- ・相談児と実際に接している家族や保育担当者等と直接合うことで、相談児を取り巻く環境を把握することができた。1回の訪問でできることは、限られたことではあるが、今後の支援計画を立てていく上で、必要な情報、すなわち、相談児の生活状況、周囲の人とのかかわりや立場毎の思いやニーズ等を把握することは、重要であると考えられる。
- ・いずれの場合も、ビデオや写真、イラスト等の映像を用いることは、相手がその場の状況を理解する上で有効であったと思われる。話し言葉だけでは理解されにくいこと、記憶が薄れてしまうこともある。これまで経験したことがないこと、体験できないことを少しでも理解してもらえよう資料の在り方を今後も検討したい。
- ・本校担当者が家庭や園で実際に行動してみることも、相談担当者として、子どもや家族、保育士の気持ちをより理解する上で貴重な体験であった。学校での相談時とは異なる状況を体験することで、今後の支援の在り方を考えることができた。
- ・訪問相談の回数、頻度は、出張旅費、相談者数ならびに相談担当者の持ち時数等に影響されているのが実態である。計画的に訪問を行うためには、学校での相談形態も含めた総合的な支援計画立案と評価を行う必要がある。

聴覚障害を併せ有する重複障害のある乳幼児に対する支援

相川利江子

1 はじめに

近年、障害の多様化にともない、本校に通っているお子さんの3分の2が聴覚と他の障害を併せ有するお子さんである。

初回相談には、他の病気や障害についてさまざまな病院の検査や診断、治療を経て、ようやく聴覚障害についての支援にたどり着いたというケースが多く、聴覚のみの障害のお子さんよりも来校が遅れるケースが多い。

なかには身体の発達に遅れがみられ1歳になっても首がまだ据わっていなかったり、筋緊張や麻痺があったりして、お子さんの発信が掴みにくくお子さんとのやり取りを実感できないため働きかけが無言で消極的になりがちなケースも少なくない。そんなお子さんも、よく観察をしてみると微かな目の動き、手足の動き、表情の変化等で自分の気持ちを立派に発信している。ほんの僅かではあるが、確実な気持ちの発信であることを保護者に伝え、ともに確認することでお子さんの聞こえの様子や発信について理解を促すよう努めている。そして保護者が少しでもお子さんとのコミュニケーションを楽しめるようになり、愛着を持って子育てに喜びが持てるようになるために支援をしていきたい。

また、そのお子さんにとって今どのような療育が必要なのかを保護者と話し合い、適切な療育機関を紹介していくことも必要となってくる。しかし、支援費や定員の関係で2歳くらいまでは受け入れてくれる機関が少なく、家庭で過ごしているケースが多い。それまではお子さんの療育といっても本校教育相談と病院への通院のみであり、保護者にとって本校の教育相談が心のよりどころとなっている。まず、そんな保護者の悩みや不安に対する共感者となってよき聞き手となることを心がけたい。次に、同じ悩みや不安を持つ保護者同士の仲間づくりの手助けをしていきたい。

2歳を過ぎるとお子さんは、マザーズホーム、発達支援センターなどの母子通園施設で療育を受けるのがほとんどである。普段の他施設での療育と本校での教育相談とともにトータル的に支援をしていく必要がある。そこでお子さんが通っている他の療育機関、医療機関との連携を取り合い、お子さんの身体発達を含めた全体像を共通理解し、あらゆる側面から支援をしていきたい。

そのためには他機関との連携が重要であり、本校では関係諸機関との関係づくりを以下のように取り組んでいる。

2 他の療育機関との連携

地域における療育施設、保育園、幼稚園などでは聴覚障害に対する知識が不十分なために、お子さんの療育や指導が手探りで行われている場合もある。そこで聾学校の専門性として、聴覚障害について理解していただき、お子さんの聞こえに配慮したかわり方を知らせていく必要がある。実際にこちらから施設訪問させていただき、お子さんの療育や指導を参観し、お子さんの

聞こえについて説明をしたり、配慮が必要と思われるところはお願いをしたりする。それと同時に、聴覚以外の障害について支援の方法を情報提供していただき、本校での指導に活かすようにしている。

また、他療育施設の担当者が本校へ来校してくださり、お子さんの指導を参観し、お互いの日頃の悩みや疑問について話し合いをもつことで、そのお子さんについての支援を共通理解することができる。

その他、保護者を介しての情報交換も重要である。保護者を通して日頃の指導に活かせる情報を提供したり、いただいたりしてお子さんの課題について療育機関と本校と保護者がお互いに共通理解していけるよう心がけている。

- ① 電話連絡・・・療育施設の担当者にご挨拶の電話をする。
(お子さんの様子をうかがい、連携の課題を探る。)

- ② 施設訪問・・・指導の様子を参観する。
(音への配慮は？話しかけ方は？かかわりの手立ては？等の観点で見ると見る。)
担当者との話し合いをする。
(情報交換し、お子さんの発達の捉え方等について共通理解する。)

- ③ 「聞こえと言葉の基礎講座」開催・・・聞こえ、補聴器、発音指導などの講座を開催し、聴覚障害についての理解を深めていただく。
幼稚部・乳幼児教育相談室公開開催・・・実際にお子さんの指導の様子を参観していただき、話し合いをもつことで本校の教育について理解をしていただく。

- ④ 講師依頼を受ける・・・療育施設の職員研修に出向き、聞こえ、補聴器、かかわり方について講義をすることで、聴覚障害について理解を深める。

3 医療機関との連携

本校の相談対象児が通う病院への施設参観を行ったり、年に数回医師、言語聴覚士が学校へ参観にお見えになり、お子さん達の様子を見ていただいたりしながら、耳鼻科医、言語聴覚士とのケース会議を行うことができ、情報交換することが可能になった。

また、お子さんの機能訓練（PT）に同行し参観させていただきながら、身体面での配慮を伺い本校でできる支援を教えていただいたり、訓練時のお子さんの聞こえや発信の様子について説明したりして情報交換することもある。

補聴器の装用については、毎週来校する補聴器店との連携を密にとることで、補聴器の特性の調整など相談にのってもらっている。また、補聴器の管理、聴覚の管理に関しては医療機関と補聴器店と連携をとることが可能である。

- ① 施設参観・・・病院での受診、検査の様子を見せていただく。
 （お子さんの受診時の様子が推察できる。）
 耳鼻科医、言語聴覚士とのケース会議を行う。
 （お子さんの聴力低下や、補聴器装用効果等、疑問点を尋ねる。）

- ② 学校参観・・・耳鼻科医、言語聴覚士に幼稚部・乳幼児教育相談室公開、文化祭を始め、年に数回学校参観していただきお子さんたちの様子を見ていただくとともに本校の教育についてご理解いただく。

- ③ 機能訓練（PT）に同行・・・訓練を参観する。
 （姿勢等、身体面での配慮を伺ったり、訓練中の聞こえやかかわりへの配慮を伝えたりして情報交換する。）

- ④ 補聴器管理・・・補聴器店、耳鼻科医に相談できる関係づくり
 （補聴器の調整、装用、聴力検査について相談し、指示を受ける。）

4 福祉、保健、労働機関との連携

本来ならばそれぞれの地域の市役所障害福祉課、母子保健課などへの、本校が乳幼児教育相談をしていることなどを啓発する必要がある。そこで幼稚部・乳幼児教育相談室公開のご案内を出し、多くの関係者に来校していただき本校の幼稚部の教育についてご理解をいただく機会を設けており、保健師さんの参加も増えてきている。今後、リーフレットの配布など啓発活動を通して、保健師さんとの連携も取れるようにしていきたいと考え、近隣の市町村に働きかけ始めたところである。

① 幼稚園・乳幼児教育相談室公開開催・・・実際にお子さんの指導の様子を参観していただき、本校の教育について理解をしていただくとともに、お子さんの存在を知らせる。

② リーフレット配布・・・市町村の役所、保健所等へのリーフレット配布による啓発活動

5 事例

A児 染色体異常 聴覚障害（右耳60dB、左70dB）+肢体不自由

初回相談・・・1歳3か月で来校。

主訴) 聴覚障害が発見されたばかりで、補聴器を装用したい。

寝返り程度で座位は保てない。

感覚過敏あり、玩具にも手を触れようとしない。

知的な発達の遅れがあり、子どもの表出が汲み取れず、どうコミュニケーションをとったらよいのか分からない。

- ・補聴器の購入手続きについて福祉課への手続きを助言し、補聴器装用が定着するまで個別相談を継続することとした。
- ・主障害は肢体不自由を伴う発達の遅れであることから、療育施設での機能訓練を含めた療育をお勧めし、地域の療育センターを紹介した。



保護者が市福祉課への働きかけをした結果、2歳になるまで入所できない。定員制であるためすでに待機児がおり、いつ入所できるか見当がつかないとのこと。



- ・補聴器の装用はできたが、療育施設への入所が決まるまで、しばらく個別相談を継続し母の不安に寄り添うことにした。
- ・お子さんへのかかわり方について共に遊びを通して考えていくようにした。



2歳5か月で入所可能となり、週4日通い始めたが、お子さんへのかかわり方について継続して相談にのって欲しいとの母親の強い要望で、本校の個別相談も週1回継続することとなった。



地域の療育センターとの連携を図りながら共に支援していければと考えた。

そこで以下のような取り組みをした。

① 4月 電話連絡

- ・入所してまもなくご挨拶の電話をかけ、今後の連携をお願いすると共に、施設訪問させていただくことのご了解をいただく。

② 7月 施設訪問

- ・子どもの様子を見せてもらい、子どもの聞こえについて説明し、手遊びなどの時の音源への配慮やかかわり方の配慮事項などをお話しし、機能訓練や摂食指導についての見解をお聞きすることで、本児にとっての支援の仕方を共通理解した。

③ 9月 幼稚部・乳幼児教育相談室公開

- ・学校公開の案内を出し、療育施設から参観に来ていただく。
- ・本児の担当のリハビリセンターのPT、療育センターの担当者に実際にお子さんの様子を参観していただき、担当者との情報交換をして本児にできる支援は何かを共通理解した。

④ 1月 就学についての相談

- ・保護者を通して、リハビリセンターの就学についての見解、療育センターの就学についての見解をそれぞれうかがい、本校の就学についての見解を含めて、保護者と本児にとって今必要とされる支援は何かを話し合う。
- ・最終的には保護者の判断で本校の幼稚部へ年中から入学することになった。



幼稚部入学後も継続して、リハビリセンターのPTを受けており、担任との連携を継続している。さらに、病院への摂食指導にも同行し、給食介助に助言をいただく等連携をとっている。

6 今後の課題

聴覚と他の障害を併せ有するお子さんの支援には、あらゆる側面から発達を捉え共通理解して、より専門的な個々のニーズに合わせた支援が必要である。このように各関係諸機関との連携をとることで、聴覚障害の専門性にとどまらず、あらゆる障害の専門性を取り込みながら個々に合わせたトータル的な発達の支援が可能になればと考える。少しずつではあるが、他施設との連携をとれるようにはなっている。今後はさらに、それぞれの担当者が一堂に会して、個々のお子さんのケース会議を定期的に開くことで、そのお子さんの全体の発達像を捉えた支援のあり方について共通理解することができればよいと考える。そして個々に合わせた専門的な支援が可能になればと考える。

また、県下に聴覚障害児の乳幼児教育相談を行っているのは、本校を含めて4箇所しかない。なかには首も据わらない乳幼児を2時間近く車に揺られて連れて来るケースもあり、その負担は大きい。地域の各養護学校との連携により、サテライト教室を置くことで地域での相談、指導が可能となればこの問題は軽減される。盲・聾・養護学校のセンター化においては、早期教育にも目を向け、ぜひ養護学校での難聴児の相談を実現したいと願う。

自宅をなかなか出ることのできないお子さんに対しては、さらに地域の保健師さんと連携をとることで、定期的な家庭訪問による支援もできればと考える。そのためには、地域への啓発活動を積極的に行い、本校の乳幼児教育相談の取り組みを理解していただけるよう働きかける必要がある。

個別家族支援プログラムについて

村脇佐知

家族支援を行うにあたって、「何が大切か？」は家族ごとに違います。

家族構成・保護者の生育歴・価値観・年齢・障害観・障害認識・相談開始時期・きょうだいとの関係・祖父母の影響力・地域性 など、それぞれの家族を取り巻く環境や状況は、実に様々であるからです。

ですから当然、ニーズや支援内容も家族ごとに違ってきます。

家族支援の観点から、実際の取り組みを3家族の事例でご紹介します。

事例1【家族Aの場合】

家族構成 父親
母親
姉（5歳1ヶ月 幼稚園）
本児（1歳3ヶ月）

1) 事例のプロフィール

本児が、ろう学校の乳幼児教育相談に来校を始めた頃、姉が突然 幼稚園に行きたがらなくなる。それまで、姉が幼稚園を休むことはほとんどなく、毎日 喜んで通園していた。

母親は、本児の聴覚に障害があることが分かったばかりで、心理的に不安定になっているところに、姉の理解できない突然の行為に戸惑いを隠せない様子。どうしたらよいかと泣きながら相談された。

2) 事例に対する家族支援

① 両親と話し合う。

まず、母親にもう1度 姉の行動や言動等を訊き、一緒に姉の気持ちを考えた。

また、母親に、父親にも現状を伝え両親で話し合うことが大切ではないかとアドバイスした。

父親も来校されることが多くなったので、その度に姉のことについて話し合った。

その中で、乳幼児教育相談担当者が、直接 姉と話しをさせてもらいたいことを伝え、家庭訪問をすることになった。

② 姉の話を聴く。

家庭訪問をし、姉と遊んだり話を聴いたりした。

姉は明るく、活発で優しい女の子であった。それ故に、本児のことを心配しており、急変した家族（両親）の様子や環境も敏感に感じ取っていた。

また、姉の話をゆっくり聴いていく中で、母親と本児がろう学校へ行くことで、非常に寂

しい想いをしていることも分かった。幼いながら、大きなストレスを感じていて情緒も不安定になっていた。ろう学校がどんなところで、何をしているのかわからない。そこに、母親と本見が行っているということが不安になる1番の原因のようであった。

③ 幼稚園の担当者と話し合いを行う。

姉の通う幼稚園の担当者と連絡を取り合った。園では変わった様子はなく、元気に過ごしていた

とのことであった。幼稚園の担当者も姉の突然の通園拒否に原因が分からず、困惑されていた。ただ、以前は本見の話をよくしてくれていたのに、本見のことを訊ねても話したくない様子が見られるようになったことが気になっていたとのことであった。

幼稚園担当者は、母親から本見のことは聴いておられたので、聴覚に障害があると分かってから急変するであろう家庭環境の中で、きょうだいがうける心の負担について等をお話した。

また、聴覚障害についても、正しく理解していただけるように、基礎的な知識や障害認識の面についても何回もお話させていただいた。今後も姉の心理面をサポートすることを中心に連携して支援していくこととした。

④ 姉を支援する。

ろう学校に、本見と一緒に遊びに来てもらうことから始めた。

ろう学校で、活動する本見や母親の様子を知ることで不安が少しずつ解消されていった様だ。

来校して本見と音遊び等の活動をするのを喜び、家庭でも学校での活動を父親に伝えたり積極的に本見に関わるようになったとのことであった。

また、乳幼児担当者と姉で手紙のやりとりを始めた。姉からの提案であった。手紙の中身は自分の好きなアニメのことや食べ物のこと、イラストなど 直接、本見について触れるようなものではなかった。

⑤ 両親と確認する。

姉の幼稚園通園が再開され、母親は安心して、本見の育児に専念することができるようになった。

両親とは、本見だけではなく、姉にも愛情をそそいでいかなくてはならないことを再確認した。

3) 家族支援後の変容

手紙のやりとりが1ヶ月程続いた頃、手紙の中に幼稚園の話題が増え、通園が再開されることになった。

母親の情緒が安定するのに比例して、姉も落ち着きを取り戻していった。

事例2【家族Bの場合】

家族構成 父親
母親
本児（3歳5ヶ月 乳幼児教育相談・保育園）
妹（2歳1ヶ月 保育園）
妹（0歳6ヶ月）

1) 事例のプロフィール

本児ときょうだいの通う保育園に働きかけた事例である。本児は本校乳幼児教育相談と地域の保育園に通園して3年になる。手話やことば（音声言語）も、少しずつ獲得し、両親や友達とのコミュニケーションを楽しみつつあった。また、3番目のお子さんも生まれ家族全員で喜んでいた。しかし、ちょうどその頃、2番目の子どもである2歳の妹が情緒不安定になる。

突然、泣いたり 笑ったり 怒ったりする。特に保育園で、不安定になり、保育園の担当者から直接、乳幼児教育相談担当者に相談があった。担当者同士は、本児のことで前々から面識があった。

妹の様子に変化していることは、乳幼児教育担当者も感じていた。ろう学校に遊びに来る度に、だんだん無口になっていき、この頃になると一言も話さなくなっていた。

2) 事例に対する家族支援

① 両親と話し合う。

保育園の担当者から、本児の妹のことで相談があったことを伝えた。保育園担当者と母親との間での話し合いをもっておられたが、何回も回数を重ねることが大切ではないかとアドバイスした。また、保育園とろう学校と連携して妹を支援していきたいと想っていることを伝えた。

両親も妹のことを心配していた。家庭では、どうしても本児中心の生活になってしまうことを冷静に捉えていた。最近、よくしゃべるようになった妹との話を聴いてあげるよりも、本児と話をすることのほうが多いと言われる。また、家庭では手話を使うことが多いが、妹には理解できないこともよくあるようだ。さらに、3番目の赤ちゃんが生まれたばかりで、2番目の妹にゆっくり関わることができないことが分かった。

② 保育園と協議する。

園長先生をはじめ、園の先生方と一緒にケース会議を開いた。協議の結果、家族の中で孤立してしまったのではないかとという意見で一致した。また、保育園では、本児を避けるようなところが出てきており、補聴器を装用しており、手話を使う本児を他の園の友達とは違う、変ではないかと思っているのではと推測した。

③ 教育相談担当者会で協議する。

ろう学校の職員間で協議会を開き、乳幼児教育相談担当者のみ意見ではなく、幅広い見解を求めた。ろう学校に来校する度に話をしなくなったことについては、コミュニケーションが十分にとれない状況(姉以外の友達とも十分にコミュニケーションが図れない)の中で、ろう学校に怖いイメージを抱いているのではないかという意見が出された。

④ 保育園に協力を求める。

保育園の先生方の協力を得て、保育園の雰囲気を変えようということになった。保育園の活動の中に手話や指文字を使った活動を取り入れたり、聴覚障害について園児にも正しい情報を提供していこうということになった。園の先生方の提案で保護者を対象とした手話教室も開くことになった。

乳幼児教育相談担当者からは、手話を取り入れた歌遊びを提供したり、指文字表を壁に貼る等の取り組みを紹介したりした。手話に関する情報提供とアドバイスも行った。

また、園児全員を対象とした障害認識に関する活動(紙芝居や人形劇等を使って、補聴器の大切さやきこえないということがどういうことなのか等と伝える啓蒙活動)も積極的に行った。

3) 家族支援後の変容

保育園は手話ブームとなり、園児たちが競って手話を覚えて使うようになった。おゆうぎ会でも手話を用いた歌が発表された。妹も明るさを少しずつ取り戻し、情緒も安定してきた。

以前ほどではないが、少しずつ話をするようになってきている。ろう学校に来校した時も本児の友達と楽しそうにコミュニケーションを図っている。本児に対しても、特別視することがなくなり、「手話もできるお姉ちゃんはすごい」と思っている様に見える。

両親の関り方も変容し、妹の話もよく聴くようになったので、妹が家族の中で孤独感を感じることも少なくなったように思う。

事例3【家族Cの場合】

- 家族構成 父親
- 母親
- 兄(4歳6ヶ月 本校幼稚部)
- 本児(3歳3ヶ月 乳幼児教育相談・保育園)
- 祖父
- 祖母

1) 事例のプロフィール

兄弟とも聴覚に障害がある家族のケースである。家族支援が十分にできなかった事例である。

兄と本児は、ほとんど同時に聴覚に障害があることが分かった。兄は半年ほど乳幼児教育相

談に来校し、その後、本校幼稚部に入学した。そのため、両親に障害認識の面などの支援があまりできないうちに幼稚部への母子通園が始まった。手話よりも口話指導を徹底して欲しいという父親の要望とまだ今の段階では、コミュニケーションをとる楽しさを重視すべきとする幼稚部の方針がぶつかり、母親が板ばさみになるような状態が続いた。母親は困り果てすべてにおいて消極的な態度をとるようになり、本児の養育に対しても意欲がみられなくなった。

2) 事例に対する家族支援

① 本校幼稚部と連携する。

兄の担当者を中心に、協議や情報交換を行った。要望をきいてくれないと訴え、不信感を募らせる父親に対して、誤解であることを分かってもらうために、保護者支援の具体的な方法をとともに考えた。両親とも、わが子の聴覚に障害があることが分かったばかりで、それを受け入れることができていない状況であるので懇談や両親学習会を行う必要があると思われた。

障害認識の面での支援は、本児が乳幼児教育相談に来校しているのので、教育相談担当者を中心になって両親に行くことを確認しあった。

② 父親に働きかける。

父親は仕事の都合もあり、ほとんど来校することができないので、学校の様子やわが子様子も分からない状況であった。父親の理解を得るためにも、とにかく学校に来ていただくことが大切だと思い、学校行事への参加等を呼びかけた。

③ 母親との懇談を重ねる。

母親の想いをうけとめることに努めた。家庭では、父親と話し合いをもつようにアドバイスした。

母親がひとりで抱え込んでしまっている課題が多いため、母親の悩みや相談を十分、聴くことを心がけた。

④ 祖父母に働きかける。

父方の祖父母の存在が大きく、両親が祖父母の考えに左右される点多々あった。祖父母のろう学校に対するイメージが悪く、正しく理解していただけていないことが分かったので、来校していただくよう働きかけた。

3) 家族支援後の変容

父親や祖父母に対して、来校していただくよう働きかけてきたがうまく支援できず、結局、兄は幼稚部を辞め、地域の保育園に編入した。本児も本校の乳幼児教育相談から地元の大学の教育相談に移った。校内にきょうだいがいる場合は、家族支援の視点に立ったチームを組むことが重要であることを感じた。また、それぞれ個別にみる観点ときょうだいを一緒にみる観点

の必要性を強く感じた。

このように実際の取り組みを通していても、家族の状況はそれぞれ違い、支援の内容も一家族ごとに違います。家族の数だけ、個別の支援プログラムが必要となるわけです。

本校の乳幼児教育相談では、現在、筑波聾学校で乳幼児教育相談を担当されている福島朗博先生が、お考えになり発表された個別の家族支援プログラム〔ろう学校乳幼児教育相談における個別の家族支援プログラム 国立特殊教育総合研究所 長期研修員研究成果報告書(2000)〕をベースに「個別家族支援プログラム」を作成し、実施しています。

では次に、

この個別の家族支援プログラムを用いて行った支援事例をご紹介します。

事例4【家族Dの場合】

家族構成 父親
 母親
 本児（0歳7ヶ月）
 祖父
 祖母

1) 事例のプロフィール

本児が聴覚に障害があることが分かったのは、生後3ヶ月の時であった。肺の発育が遅く、検査を受けたことがきっかけで発見された。本校乳幼児教育相談に来校したのは、生後7ヶ月の時であった。母親は、初めての出産、初めての子どもに戸惑いが大きかった。また、早い時期に聴覚に障害があることが伝えられたことで、わが子にどのように接すればよいのかわからず、子どもと目を合わせることもできない様子であった。

相談日には、必ず自分の母親（母方の祖母）と一緒に来校した。母親は自分自身を責めている様子も伺えた。

また、夫（父親）に対しては、もっと育児に協力してほしいと不満をもっており、自分の父親（祖父）にはストレスを感じるとよく話された。

2) 個別の家族支援プログラムを用いての家族支援

① 初回相談から1年間の支援計画<個別家族支援プログラムの流れ>を立てる。

期	ねらい	実際の支援内容	
初回	<ul style="list-style-type: none"> ○ 予想や気休めのない正確な説明 ○ 受けとめる ○ 家族のニーズを引き出す ○ ニーズの整理 ○ 支援内容決定 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教育相談ガイダンス <ul style="list-style-type: none"> ・両親に教育相談の理念や方針を説明 ○ 実際の相談活動の中で <ul style="list-style-type: none"> ・懇談、カウンセリング、親子のかかわりの様子、連絡帳 ○ 家族のニーズ情報収集 <ul style="list-style-type: none"> ・保護者からのニーズ表作成 (表2参照) ・家庭訪問 ○ 担当者がとらえたニーズ情報収集 <ul style="list-style-type: none"> ・担当がとらえた家族の状態とニーズ表作成 (表3—①参照) ・関係諸機関からの情報収集 ○ 家族と担当者間のニーズのずれのチェック <ul style="list-style-type: none"> ・ずれが大きい場合は懇談等を行う ○ 必要と考えられる支援内容を担当者間で確認 (表3—②参照) ○ 支援メニュー案の作成 <ul style="list-style-type: none"> ・個別の家族支援メニュー案作成 (表4参照) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 個別学習会 ○ ひよこ学習会 (一斉) ○ ひよこ座談会 (一斉) <p style="text-align: center;">(表1参照)</p>
6ヶ月	<ul style="list-style-type: none"> ○ 支援内容の確認・修正 (月1回が原則) *必要に応じて ○ 年度の支援内容の評価と課題 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 支援内容の評価と家族のニーズ再検討 <ul style="list-style-type: none"> ・チェック表 (親による評価) 使用 (表5参照) ○ 今年度の評価と課題確認 (次年度へつなぐために) <ul style="list-style-type: none"> ・チェック表使用 (表5参照) ・母親の自身や子ども、家族への想いの変容を確認 ・家族のニーズの再検討 	
12ヶ月		<ul style="list-style-type: none"> ・次年度や就学に向けての希望確認 	

② 年間を通して学習会や座談会を行う。表1 参照

表1 ひよこ支援内容

ひよこ学習会（一斉）	<p>教育相談の0～2歳児が月1回（第2水曜日）一堂に会し、親同士で学ぶ利点を活かす。</p> <p>〔内容〕</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 子育て 2 言語習得と脳の可塑性 3 きこえについて 4 耳の解剖と生理 5 補聴器について 6 きこえとことばの発達 7 ことばの発達を促すには 8 人工内耳について 9 手話言語について 10 学校教育・成人後の人生
座談会	<p>学習会で学んだことの進化を行い、保護者の受けとめの幅を広げていく。</p>
個別学習会	<p>保護者の状態に合わせて、聴覚障害やかかわり方についての基本的な知識を個別指導時に、継続して提供する。親のニーズにあわせ、実施時期を調整する。</p> <p>〔基本的な知識の提供〕</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 家庭の重要性と親の役割 ② 聴覚障害についてと補聴器管理 ③ 聴覚学習 ④ 前言語期コミュニケーション など <p>〔情報提供〕</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 福祉の情報 ② 補聴器管理の情報 ③ 成人ろう者の情報 ④ 関係機関活用の情報 ⑤ 本校の活動の情報 など

③ 家族のニーズを引き出すために、保護者からのニーズ表を作成する。（表2参照）

懇談の中で担当がこのような質問内容を頭に入れながら話を進める。話の中で、家族からのニーズをつかみ、支援内容を立てるためのニーズ整理の手がかりとする。

（*個人情報として厳重に管理し、プライバシーを守る。）

表2 保護者からのニーズ表

保護者からのニーズ表	
	氏名 _____ 月 _____ 日
○教育相談に来られるまでの間のことや自分の中で整理がつかず、問題となっているものがありましたら教えてください。また、育児のこと、家族のこと、地域のことなど何でも自由にお話してください。	
1	<p>どんなお子さんに育ててほしいですか？</p> <p>少しでもいいので、音が聞こえるようになってほしい。</p> <p>やさしく、思いやりのある子に育ててほしい。</p>
2	<p>ご家族について想っていることや困っていることはありますか？</p> <p>特にありませんが、父親にもっと育児を協力してほしい。</p> <p>祖父と別居したい。話をすることもストレスに感じる。</p>
3	<p>ご自身に関してのことは？</p> <p>特にありませんが、一生懸命がんばりたいです。</p>
4	<p>教育相談にどんなことを望まれますか</p> <p>学習会をたくさん開いてほしいです。</p> <p>話をたくさん聞いてほしいです。</p> <p>子育てについて分からないことばかりなので教えてほしいです。</p> <p>音あそびをたくさん知りたいです。</p>
5	<p>育児や障害について、わからないこと・相談したいこと・知りたい情報はありますか？ (健診や病院等で言われたことで気がかりになっていることはありませんか)</p> <p>たくさんありすぎて分かりません。</p>
6	<p>両親で希望する情報提供がありますか。</p> <p>人工内耳について</p>
7	<p>将来的な家族設計がもしありましたら可能な範囲で教えてください（就園や就学のことなど）</p> <p>今は全く見通しがありません。</p>
8	<p>教育相談に通うのに問題となっていることや困っていることがありますか。</p> <p>距離がありすぎて遠いです。自分ひとりでは運転が不安で、祖母についてきてもらっています。祖父の機嫌が悪くなり困っています。</p>

④ 担当者が捉えた家族の状態とニーズ表を作成する。

初回相談から6ヵ月後と12ヵ月後に、担当者が①状況把握と②ニーズの整理を行う。
以下のような表にまとめる。

(1) 状況把握

表3—① 担当がとらえた家族の状態とニーズ表

① 初回相談から6ヶ月

家族の状態	本児に対しての想いや行動	自分自身や他の家族に対する想いや行動
母親	<ul style="list-style-type: none"> ・目を合わせようとししない ・関わり方が分からない ・「普通に育てていいのですか？」 	<ul style="list-style-type: none"> ・診断直後のショック ・どうしてと自分を責める ・話を聞いて欲しい ・両家の祖父母に申し訳ない（自分の母親だけが味方） ・単身赴任の父親に怒りを感じる。
父親	<ul style="list-style-type: none"> ・診断直後はショック ・先まで考えられない ・初めての子どもでとてもかわいい ・仕事が休みの時は必ず来校 ・関わり方が自然で上手 	<ul style="list-style-type: none"> ・単身赴任のため、いつも育児共同することは難しく、母親に対してすまないという気持ち。 ・祖父母の協力に感謝している
祖父母	<ul style="list-style-type: none"> ・かわいいがうまく関われない ・将来が不安でたまらない。 ・話せるようになるのだろうか。 ・母方の祖母はよく来校 	<ul style="list-style-type: none"> ・父親と母親が不憫に思える。 ・自分達のできることは何でも協力したい。 ・地域の人達に知られないようにしたい。 ・嫁を責めてしまう（父方の祖母）

家族全体の状態

状態を捉える項目	本児に対しての想いや行動	家族のそれぞれの想いや行動
障害認識	<ul style="list-style-type: none"> ・補聴器が見えないように髪を伸ばす。 ・話せるようになってほしい。 ・聞こえる人に近づいてほしい。（両親） ・聞こえる人に負けないでほしい。（祖父） ・すくすくと育ててほしい。（祖母） 	<ul style="list-style-type: none"> ・聴覚障害の情報不足 ・聞こえる人が上 ・地域の人に知られないようにする。

教育への意欲	<ul style="list-style-type: none"> ・教育相談日 欠席なし。 ・とても意欲的 ・本児にいいと思われるものは購入。 (本や音の出るおもちゃ等) ・いろいろな教育機関を訪ねる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・祖父を中心に全員で協力する。 ・本児中心の生活をする。
地域や関係機関との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・ 医大、障害者センター、保健師に相談 	<ul style="list-style-type: none"> ・ろう学校を中心に関係機関とつながりたい。 ・地域の機関とは、つながりを持ちたくない（発達支援事業などは拒否)

② 12ヶ月後

家族の状態	本児に対しての想いや行動	自分自身や他の家族に対する想いや行動
母親	<ul style="list-style-type: none"> ・目が合うようになった。(とっさの時はまだ) ・関わろうとする姿勢が見られるようになった。 ・「特別なことはないのですね。子育ては変わらないのですね。」 ・人工内耳をすべきか。 ・もっと通じあいたい。 ・手話を覚えたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・どうしてと自分を責める ・父親も協力的になってきたが、まだ不満。 ・祖父が来校して、うれしかった。 ・祖父も孫はかわいいのだと確認できた。 ・人工内耳について家族に知ってもらいたい。
父親	<ul style="list-style-type: none"> ・もっと子どもと向かいあいたい。 ・ろう学校卒業生の進路を知りたい。 ・もっと、見通しがもちたい。 ・人工内耳について知りたい。 ・わがままに育てているように感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・単身赴任のため、いつも育児共同することは難しく、母親に対してすまないという気持ち。 ・祖父母の協力を感謝しているが、あまやかしている点が気になる。 ・母親がいつもイライラしている。
祖父母	<ul style="list-style-type: none"> ・かわいいがうまく関われない ・将来が不安でたまらない。 ・話せるようになるのだろうか。 ・ろう者への偏見あり。(過去の経験から) ・祖父は来校を機に関わりが増した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・母親の苦勞を知る。 ・自分達のできることは何でも協力したい。 ・地域の人達に知られないようにしたい。 ・医療的な面(人工内耳手術や聴覚障害など)についてはノータッチでいたい。母親の話には耳を傾けない。

家族全体の状態

状態を捉える項目	本児に対しての想いや行動	家族のそれぞれの想いや行動
障害認識	<ul style="list-style-type: none"> ・補聴器が見えないように髪を伸ばす。長髪になった。 ・話せるようになってほしい。 ・きこえない我が子を見つめる。(両親) ・聞こえる人に負けないでほしい。(祖父) ・すくすくと育ててほしい。(祖母) 	<ul style="list-style-type: none"> ・聴覚障害の情報提供を拒否(抵抗) ・聞こえた方がいい。聞こえるにこしたことはない。 ・母親が地域の発達支援子育て会に参加する。 ・地域の人に知られないようにする。(祖父母)
教育への意欲	<ul style="list-style-type: none"> ・教育相談日 欠席なし。 ・とても意欲的 ・成長を喜ぶ ・「詳しく分からないのでお願いします。全面的に学校で。」第三者的発言が増え始める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・祖父を中心に全員で協力する。 ・本児中心の生活をする。 ・子育てが楽しくなってきた。 ・時々家族間の関係につかれる。
地域や関係機関との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・医大、障害者センター、保健師に相談 ・地域主催の発達支援活動(月1)に参加。 ・関係機関との連携強化 ・運動会のテレビ放映出演拒否 	<ul style="list-style-type: none"> ・ろう学校を中心に関係機関とつながりたい。 ・親戚や近所に本児のことを知られないように。

(2) ニーズの整理

① 初回相談から6ヶ月

ニーズ項目	求められる家族のニーズ
親子関係	かかわりが楽しくなる具体的な育児のかかわり方への支援
母親	ショックを和らげる共感的なカウンセリング、親同士のふれあい
父親	将来の見通し、聴覚障害についての基礎的な知識
祖父母	両親の育児への後押し、障害に対する正しい理解、モデルとなる成人ろう者との出会い
障害認識	情報不足の解消、両親(家族)懇談
教育への意欲	教育相談への信頼感、教育への期待感
家族のネットワーク	先輩家族とのふれあい

② 12ヶ月後

ニーズ項目	求められる家族のニーズ
親子関係	親子での楽しい活動を増やす（モデル提示、アドバイス）
母親	ショックを和らげる共感的なカウンセリング、将来の見通し、関係機関の連携
父親	将来の見通し（中高等部見学）、聴覚障害についての勉強会
祖父母	モデルとなる成人ろう者との出会い、松本弁護士の本
障害認識	情報不足の解消、両親（家族）懇談
教育への意欲	教育相談への信頼感、教育への期待感
家族のネットワーク	いろいろな家族とのふれあい（地域含む）

⑤ 支援内容を決定する。

必要と考えられる支援内容を担当者間で、初回相談から6ヵ月後、12ヵ月後に確認する。

以下のとおりである。

◎ 必要と考えられた支援内容

(1) 初回相談から6ヶ月

表3—②

1 母親との時間をかけた懇談
2 祖父母の同行、認識や見通しを持たせる他学部参観
3 両親で聞きたい、または父親、祖父母に聞かせたい情報提供の選択
4 個別学習の充実
5 お子さんの成長を分かりやすく具体的に伝えていく、ひよこ連絡帳の活用
6 先輩家族の紹介や成人ろうの方との出逢いの場を作る
7 関係諸機関との連携

(2) 12ヶ月後

表3—②

1 関係機関との連携（HAフィッティングの方針）
2 両親との時間をかけた懇談（筑波の情報、パンフ）
3 母子間の関わりの促進
4 幼稚部の活動に参加（もちつき）

⑥ 支援メニュー案の決定

必要と考えられた支援内容をもとに、月別の個別家族支援メニュー案を作成する。

表4 12月のメニュー案

	子ども	お母さん・お父さん	家族（きょうだい・祖父母）
目 標	<ul style="list-style-type: none"> ・お片づけの曲とおやつの曲の違いが分かる ・お母さんと楽しく遊べる ・防音室に慣れる ・音遊びを楽しむ ・幼稚部のおねえちゃんに関わる（もちつき） ・集中力の観察 	<ul style="list-style-type: none"> ・子育てを楽しむ ・フィッティング経過報告、今後の見通し（機関連携） ・進路について知る（フォーラム報告） 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚部を知る
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・デカレンジャー遊び ・自分の好きなおもちゃで遊ぶ ・おやつの曲（聞いて行動） ・クリスマス絵本と楽器 ・制作（ミニクリスマスツリー） 	<ul style="list-style-type: none"> ・懇談 ・ひよこ勉強会 ・親子活動（リズムダンス） 	<ul style="list-style-type: none"> ・懇談
12月	行 事 グループ指導 (G)	個別情報提供 (☆) 合同学習会 (●)	家族の支援・協同
3日 (金) 個別	デカレンジャー おやつの曲 おもちゃ	フィッティングについて、今後の見通し(懇談)(☆)	終講式案内 もちつき大会への参加の誘い(祖父)
7日 (火) 一斉	障害者センター(休み)		
9日 (木) 個別	音あそび(すべり台) おやつの曲	フォーラム報告(☆)	
14日 (火) 個別	クリスマス絵本、楽器 ミニクリスマスツリー制作(親子活動)		
16日 (木) 一斉	もちつき		
21日 (火)	終講式(クリスマス会)	発達の記録(☆) 懇談会(●)	
備 考	・障害者センターにお手紙		

⑦ 支援内容の評価と家族のニーズ再検討を行う

懇談の中で担当が以下のような質問内容を頭に入れながら話を進める。話の中で、支援内容の評価とニーズの再検討の手かかりをつかむようにする。

(※個人情報として厳重に管理し、プライバシーを守る。)

表5 チェック表（親による評価）（試案）

チェック表＜家族の評価＞

氏名 _____ 回目 _____ 月 _____ 日 _____

- 家族のニーズと支援内容について話し合いました。話し合いの後から現在に至るまでの想い、変わったところ、わからないこと、今後に向けての要望などをお聴かせください。

1 今の我が子への想い・願い

いろいろな音に気づくようになり、パパやママ、ババと呼んでくれるようになって、うれしいです。

先生とひとつひとつの成長を確認しながら、がんばってきました。今は、楽しいです。もっとたくさんコミュニケーションがとりたいです。もう幼稚部入学のことを考えています。まだまだ将来に対して不安はつきませんが、元気にのびのびとこの子らしく成長していってほしいです。

2 今の家族への想い・願い

自分の父親（祖父）の存在が大きいです。この子が生まれる前から親子関係がよくなく、今はもっと苦しいです。

私は父に昔から嫌われているので……。それから主人の祖父母が、この子をかわいがりませんし関わりを持ちたくないようです。ろう学校に通っていることもよくは思いません。

この子の父親は、よく話を聞いてくれるようになりました。私よりも聴覚障害について知りたいと言いますし、ろう者の人ともっと関わりたいと言います。手話や指文字も覚えようとしています。とても変わりました。ろう学校に何回も来ているからだと思います。祖父が変わりません。学校に行こうと言っても遠慮があるようです。祖父に理解してほしいです。

3 今の自分自身への想い・願い

ひよこ連絡帳を書くようになって、自分の気持ちが自分でよく分かるようになりました。整理がついたりします。

また、先輩のお母さん達とお会いでき、やっと分かってもらえる人に出会ったと思いました。自分でも子育てを楽しめる

時間が増えたと思います。でも、時々 どうすることもできない怒りや不安がこみ上げてきます。先生にもたくさんあたってごめんなさい。また、子どもにも激しく怒ってしまう時があるので、そんな自分がほんとにイヤになるときがあります。

- 4 これまでの教育相談の対応や働きかけについて意見をお聴かせください。
 要望を聞いて頂き、成人ろうの方との出会いの場を作っていただいたり、いろいろな企画をしてもらってとても感謝しています。
- 5 育児や障害について、わからないこと、相談したいこと、知りたい情報がありますか
 しつけについて教えてもらいたいです。反抗期に入り、学校では まだ先生を困らせながらも先生の目を見ていますが、家では、全く目もみません。いろいろな遊びを先生が教えてくれますが、家で、私はうまくできません。
 人工内耳について、もっと知りたいです。
- 6 両親または祖父母で希望する情報提供がありますか
 人工内耳について
- 7 将来的な家族設計が、もしありましたら可能な範囲で教えてください（就園や就学のことなど）
 とりあえず、ろう学校幼稚部に入学したいです。
- 8 教育相談や支援に対する要望がありますか
 一斉の時間がもっと長かったらなあと思います。もっと母親同士で情報交換がしたいです。
 それから祖父に対して何か支援してもらえませんか。
 （個人情報として厳重に管理し、プライバシーを守ります。）

3) 「個別の家族支援プログラム」を用いての家族支援後の変容

母親や家族の想いやニーズの変容がはっきりと現れている。初回相談から6ヶ月後、12ヶ月後では確実に変わってきている。担当者が家族のニーズを確実に把握できるため、計画的に支援できた。母親は育児に対して少しずつ積極的になってきている。目も合わせることができるようになった。また、父親や祖父母への働きかけにも成果がでてきている。父親は育児に協力的になってきた。祖父母も聴覚障害に対して正しく理解をし始めている。今後、必要な支援内容も明確になっている。

個別家族支援プログラムを作成・実施して見えてきたことからの新しい試み

個別家族支援プログラムを作成し実施する中で、必要と思われたこと(祖父母や父親の来校等)から以下のような新しい試みを実施した。

○ 「むかしのあそび」会の設定

- (目的)
- ・ 祖父母に来校してもらい、ろう学校を知ってもらう。
 - ・ 祖父間の交流を図る。

(設定した理由)

- ・祖父母が来校を遠慮されているように見受けられる。(きっかけ作り)
- ・ろう学校に対するイメージがよくない。(誤解)
- ・孫の学校での様子を知らない。

(結果)

- ・来校に対する抵抗感が薄れた。
- ・母親の頑張りに気づき、協力的になった。
- ・聞こえない世界を受け入れようとするきっかけになった。

○ 「パパの日」の設定

(目的) ・父親に来校してもらい、ろう学校を知ってもらう。

- ・父親も教育活動に参加してもらう。

(設定した理由)

- ・仕事があるため、来校しづらい傾向がある。(きっかけ作り)
- ・ろう学校でのわが子の様子や母親の様子を知らない。
- ・父親の気持ちを把握する。

(結果)

- ・父親の気持ちを聴くことができた。
- ・父親の子どもに対する接し方が変わった。
- ・聞こえない世界を受け入れようとするきっかけになった。

「個別家族支援プログラム」を実施してみて・・・

以下のような成果と課題があげられる。

【成果】

- ・家族のニーズが明確になった。
- ・取り組みに対する自己評価ができるようになった。
- ・より長期的な支援計画を立てることができるようになった。

【課題】

- ・集団であれば、より効果的だと思われる支援内容もあった。
- ・相談実施内容を「家族と共に考える」という姿勢を引き出すための働きかけが不十分であった。

今後は・・・

インフォームドコンセントの理念を取り入れながら「家族と共に考える」という家族と担当者の共同作業という姿勢を、より明確なものとしていく。そのための働きかけや取り組みをプログラム内に柔軟に取り入れることが大切だと感じています。また、個別での相談を軸としながら、一斉指導との一貫性を図ることも課題のひとつです。今後もそれぞれの家族のもつ理念を大切にしながら、介入にならないような支援を続けていきたいと思っています。